

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-01]

Toward indicator-driven governance: Hybrid AHP applications in sustainable community sports policies

indicator-driven governance for sustainable community sports policies

*WENBIN LIN¹ (1. Taipei National University of the Arts)

[07発-ポ-02]

児童における身体組成と下肢の運動機能の関連性

*高橋 功祐¹ (1. 石巻専修大学)

[07発-ポ-03]

幼児の着地衝撃緩衝能に関する予備的研究

*多胡 陽介¹ (1. 聖泉大学)

[07発-ポ-04]

幼児の運動能力と家庭における運動あそびの頻度および内容との関連

走・跳・投運動に着目して

*濱長 勇馬¹、高本 恵美² (1. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科、2. 大阪体育大学)

[07発-ポ-05]

中学野球選手における補食摂取が身体づくりに及ぼす影響

*笹原 千穂子¹ (1. 明星大学)

[07発-ポ-06]

習慣的なトランポリン運動経験と運動調節能力・バランス能力の関連性

*小板橋 京汰¹、吉藤 恵里子¹、青木 和浩²、河村 剛光² (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

[07発-ポ-07]

新体力テストからみた中学生の誕生月別体力推移の分析

相対年齢効果に着目して

*木戸 大貴¹、吉川 鷹吏¹、佐藤 智樹¹、大島 秀武² (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

[07発-ポ-08]

中学生における運動嗜好と体力レベルの関係

学年別傾向の検討

*佐藤 智樹¹、木戸 大貴¹、吉川 鷹吏¹、大島 秀武² (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

[07発-ポ-09]

幼児の簡便な運動能力評価ツールSMC-Kidsの結果票作成システムの開発

*香村 恵介¹、出村 友寛²、高橋 功祐³、小椋 優作⁴、松浦 稜⁵、喜屋武 享^{5,6}、縄田 亮太⁷ (1. 名城大学、2. 仁愛大学、3. 石巻専修大学、4. 中部学院大学短期大学部、5. 琉球大学、6. 京都大学、7. 愛知教育大学)

[07発-ポ-10]

発育発達を考慮した体格指標の検討

*石原 勇次郎¹、宇野 直士²、新美 尚行³、松田 晃二郎⁴ (1. 岡山理科大学、2. 山陽小野田市立山口東京理科大学、3. 九州国際大学、4. 城西大学)

[07発-ポ-11]

高這い姿勢の幼児が手で体を支える運動指導方法の開発

*佐近 慎平¹、中曽根 裕²、中井 聖³、金子 勝司⁴ (1. 新潟医療福祉大学、2. 仙台青葉学院短期大学、3. 大阪電気通信大学、4. 大阪体育大学)

[07発-ポ-12]

大学生の主観的健康感と体力レベルおよび生活習慣との関係

*吉川 鷹吏¹、木戸 大貴¹、佐藤 智樹¹、大島 秀武² (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

[07発-ポ-13]

トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査 (1)

単純集計による実態把握

*篠原 俊明¹、長野 康平²、堀内 亮輔³、中村 和彦⁴ (1. 共栄大学、2. 比治山大学短期大学部、3. 東京女子体育短期大学、4. 山梨大学)

[07発-ポ-14]

トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査 (3)

性差による検討

*長野 康平¹、篠原 俊明²、堀内 亮輔³、中村 和彦⁴ (1. 比治山大学短期大学部、2. 共栄大学、3. 東京女子体育短期大学、4. 山梨大学)

[07発-ポ-15]

幼児期における国際交流経験は記憶を通じたSES向上につながるか

南アフリカとの身体活動・体験活動を通して

*山崎 幸歩¹、村山 敏夫¹、樺澤 茉宝¹、亀岡 雅紀² (1. 新潟大学、2. 新潟医療福祉大学)

[07発-ポ-16]

トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査 (2)

マルチスポーツ経験による検討

*堀内 亮輔¹、篠原 俊明²、長野 康平³、中村 和彦⁴ (1. 東京女子体育短期大学、2. 共栄大学、3. 比治山大学短期大学部、4. 山梨大学)

[07発-ポ-17]

幼児の日常活動における運動遊びと身体活動動作

保育者調査から

*佐々木 玲子¹、石沢 順子² (1. 慶應義塾大学、2. 白百合女子大学)

[07発-ポ-18]

大学1年生アスリートのキャリア観とキャリア支援の実態 一 個別対話の有用性に着目して 一
1対1の対話によるキャリア形成支援の可能性を探る 一 競技生活からワークキャリア・ライフキャリアへの拡張 一

*豎石 亜也子²、小泉 朝香³、山口 香¹ (1. 筑波大学、2. アデコ株式会社、3. 株式会社トリデンテ)

[07発-ポ-19]

小学校教諭養成課程のシラバスから見た運動遊びの位置づけと幼児期との接続に関する教授内容

*吉田 伊津美¹ (1. 東京学芸大学)

[07発-ポ-20]

セーリング競技における帆走に関する宣言的知識の艇種による違いについて

*坂口 英章¹、青柳 領 (1. 日本経済大学)

[07発-ポ-21]

妙高市産学官連携による幼児の数学的な能力に着目した自然体験型運動あそびプログラムの開発と実践

*樺澤 茉宝¹、木下 昭二²、村山 敏夫³ (1. 新潟大学大学院、2. ミズノ株式会社、3. 新潟大学)

[07発-ポ-22]

5歳児の足圧中心動揺における試行間信頼性

*溝畑 潤¹、青木 敦英²、秋武 寛³、三木 伸吾⁴、田路 秀樹² (1. 関西学院大学、2. 芦屋大学、3. 西南学院大学、4. 島根大学)

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-01] Toward indicator-driven governance: Hybrid AHP applications in sustainable community sports policies**

indicator-driven governance for sustainable community sports policies

*WENBIN LIN¹ (1. Taipei National University of the Arts)

Introduction: This study investigates the application and integration of Multi-Criteria Decision-Making (MCDM) theory and the Analytic Hierarchy Process (AHP) in the development of sustainable sports policies in Taiwan. In the context of 21st-century sports governance—marked by increasing complexity, diverse stakeholder values, and demand for participatory approaches—MCDM provides a robust, flexible, and quantitative framework to support policy decisions at both interdepartmental and multi-level scales. Methods: Using the “Sports Village Certification” program initiated by Taiwan’s Sports Administration, Ministry of Education as a case study, we employed AHP to develop a structured and localized indicator system. The AHP model incorporated dimensions such as sports organizations, program participation, facility availability, and promotional strategies. To enhance methodological efficiency and reduce expert judgment load, we integrated three hybrid AHP approaches: SWARA-AHP, BWM-AHP, and VAHP. Results: The integration of hybrid AHP methods addressed the limitations of traditional AHP, particularly in reducing cognitive burden and improving consistency ratio management. These approaches provided stable, efficient evaluation outcomes and reinforced the validity of community-based sports policy assessment frameworks. Conclusion: We presents a theoretically grounded and practically oriented framework for sustainable sports policy analysis. The findings support the advancement of community-centered governance, indicator-driven evaluation systems, and scientifically informed decision-making. The integrated MCDM–AHP model offers valuable insights for future policy planning in localized and participatory sports development.

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20
  メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-02] 児童における身体組成と下肢の運動機能の関連性

*高橋 功祐¹ (1. 石巻専修大学)

【目的】本研究では、児童の立ち上がり動作の際に発揮される筋力や素早さ、安定時間等の下肢の運動機能に着目し、それらと脂肪量や徐脂肪量等の身体組成との関連性について明らかにすることを目的とした。**【方法】**本研究の対象は、M県I市内の小学校9校の1年生から6年生に在籍する958名（男子504名、女子454名）の児童であった。身体組成は、タニタ社製体組成計MC-780A-N（マルチ周波数8電極BIA方式）を用いて測定した。項目は、体重、筋肉量、体水分量、推定骨量、除脂肪量、体脂肪率および体脂肪量、であった。得られた結果から、タニタ（2009）の基準に準拠し、「肥満傾向児」、「標準児」、「痩身傾向児」に分類した。運動機能の測定は、タニタ製の運動機能分析装置ザリッツ（BM-220）を使用した。項目は、筋力（F/w）、素早さ（RED/w）、安定時間（Stable Time）、左右方向変動値（Vx）、荷重変動値（Vw）、左右動揺（Vx/Vw）、であった。身体組成と運動機能との関連性を検討するために、ピアソンの積率相関係数を算出した。さらに、「肥満傾向児」「標準児」「痩身傾向児」の体格分類の違いによる運動機能の関連性を検討するために、一元配置分散分析並びに多重比較検定を実施した。**【結果】**ピアソンの積率相関係数を算出した結果、男女ともに、脂肪量とF/w、Stable Time、Vw、Vx/Vwとの間、筋肉量とStable Time、Vw、Vx/Vwとの間に有意な関連性がみられた。また、一元配置分散分析の結果、男子ではF/w、Stable Timeとの間に、女子ではRED/w、Stable Time、Vx/Vwに有意な主効果が認められた。多重比較検定の結果、男子ではF/w、Stable Timeで、女子ではRED/w、Stable Time、Vx/Vwで有意な平均値の差が確認された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-03] 幼児の着地衝撃緩衝能に関する予備的研究***多胡 陽介¹ (1. 聖泉大学)

子どもの着地動作は、跳ぶことに先立って発達する重要な基本的動作の一つである。高所からの着地動作において、子どもは成人に比べて身体に受ける衝撃力が大きく、衝撃を緩衝する能力（着地衝撃緩衝能）が十分に発達していないことが報告されている。しかし、幼児や小学生児童を対象とした着地衝撃緩衝能の研究は、1990年以降、本邦では見当たらず、運動不足や体力低下が指摘されている現代の子どもの着地衝撃緩衝能の発達程度は明らかでない。そこで、本研究は横断的な調査を行う前の予備的な研究として年長児の幼児を対象に着地衝撃緩衝能を測定した。対象は年長児の幼児24名であった。複数回の練習を行った後、40 cm（動作意識なし）、40 cm（動作意識あり）、60 cmの高さの順で巧技台から2回ずつ飛び下りるよう指示した。着地時にはフォースプレートを用いて、体重当たりの鉛直最大床反力と衝撃緩衝能（体重当たりの鉛直最大床反力／鉛直最大床反力までの時間）を測定した。分析は、性別（男児・女児）、生まれ月（4～9月生まれ・10～3月生まれ）、動作意識の有無（フワッと柔らかく着地することへの意識）の観点よりt検定を用いて有意差を検証した。結果については、学会発表時に報告する。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-04] 幼児の運動能力と家庭における運動あそびの頻度および内容との関連**

走・跳・投運動に着目して

*濱長 勇馬¹、高本 恵美² (1. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科、2. 大阪体育大学)

子どもの体力・運動能力の低下が長期的に続いており（スポーツ庁, 2024；森ら, 2018）、背景には、遊び場の減少、共働き家庭の増加、デジタル機器の普及など生活環境の変化があるとされている。こうした変化により、幼児の身体活動の機会は家庭での過ごし方に左右されやすく、家庭での運動あそびの重要性は複数の先行研究で指摘されている（阪江ら, 2020；大和, 2014；香村ら, 2011）。家庭での運動あそびに関する頻度の研究で、森ら（2011）は、保護者が子どもと遊ぶ頻度や家庭での運動経験が、幼児の運動能力の発達に関係していることを報告しており、家庭における日常的な遊びの機会の多さが運動能力に影響を与える可能性が示されている。また、阪江ら（2020）は、自然あそびや製作あそびなどの遊びの頻度が高い幼児は握力や投能力といった体力・運動能力において有意な関連を示すことを明らかにしている。一方、遊びの内容に着目した研究では、大和（2014）は、親の遊びへの積極的な関与が幼児の跳ねる・よじ登るなどの動的な姿勢制御を伴う遊び機会の多さと関連していることを報告している。また、鈴木ら（1973）が、日常における遊びの傾向が動的遊び中心か静的遊び中心かによって運動能力に差が生じることを報告しており、動的な遊びを中心とする幼児はより高い運動能力を示すとしている。こうした先行研究を踏まえ、本研究では家庭における運動あそびの頻度および内容と、幼児の基本的な運動能力（走・跳・投）との関係を検討した。対象は3～5歳の幼児131名（男児59名、女児52名）とし、25m走、立ち幅跳び、およびテニスボール投げの記録を測定した。保護者には家庭で実施している遊びの種類（ジャンプ遊び、ボール遊びなど）とその頻度について質問紙調査を行った。得られたデータに記述統計を行い、相関分析、t検定または一元配置分散分析により検討した。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達 / ポスター発表**[07発-ポ-05] 中学野球選手における補食摂取が身体づくりに及ぼす影響***笹原 千穂子¹ (1. 明星大学)

【目的】本研究では、硬式野球チームに所属する中学野球選手を対象に、プロテインまたはプロテインの代替品摂取が体組成や野球に関連する体力要素への影響を明らかにすることを目的とした。【方法】被験者は東京都内硬式野球チームに所属する中学2年生34名を対象とした。プロテイン群12名、乳製品群11名、対照群11名の3群に分け、週3回3週間、練習終了後に対象飲料（プロテイン、乳飲料、水）を摂取した。介入前に食事調査、プロテインに関するアンケートを行い、介入前後に体重・体組成、体力テストの測定を行った。体力テストは、握力、壘間走、一周走、背筋力、反復横跳び、腹筋力、球速、投球回転率の計8項目とした。アンケート結果はクロス集計表にまとめ、 χ^2 検定を行った。体重・体組成、体力テストの結果は介入前後と群別の平均値の比較は二元配置分散分析を行い、食事調査の群別の平均値の比較は一元配置の分散分析を行った。【結果】アンケート調査の「プロテインを飲みたいと思いますか」に対する回答で、プロテインを週2回飲んでいる選手は「飲みたい」、週3回以上飲んでいる選手は「すごく飲みたい」と思っている傾向がみられた。全ての群で筋量と骨量が増加し、骨量はプロテイン群、乳製品群、対照群の順番に増加が大きい傾向がみられた。反復横跳びではすべての群で増加し、プロテイン群、乳製品群、対照群の順番に大きい増加がみられた。食事調査では乳製品群で炭水化物の摂取が少ない傾向にあった。本研究の全ての群でカルシウム摂取量が不足しており、プロテイン群は葉酸が推奨量を満たしておらず、補食摂取により補えた可能性が推察された。【結論】本研究では、中学野球選手を対象にプロテインまたは乳製品を摂取した結果、骨量や反復横跳びなどの値の向上がみられ、日常の食生活で不足している栄養素をプロテインまたはプロテインの代替品で摂取することが有効と考えられた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達 / ポスター発表**[07発-ポ-06] 習慣的なトランポリン運動経験と運動調節能力・バランス能力の関連性**

*小坂橋 京汰¹、吉藤 恵里子¹、青木 和浩²、河村 剛光² (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

【目的】短期間のトランポリン運動介入は子どもの運動調節能力・バランス能力の向上に寄与することが示唆されている。しかし、身体機能の発達が著しい時期における長期の習慣的なトランポリン運動経験の影響に着目した研究は乏しい。よって本研究は子どもにおける習慣的なトランポリン運動経験が運動調節能力、バランス能力に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。【方法】対象はトランポリンクラブに通う64名(男子35名, 女子29名 10.1±2.0歳)であった。測定項目は、バランス能力として閉眼片脚立ちテストおよびYバランステスト (YBT) を実施した。YBTでは、片脚立位（支持脚）から3方向への非支持脚での最大リーチ距離を測定し、脚長で正規化した値を各方向で算出した。また、3方向の正規化されたリーチ距離から算出される複合スコアも用いた。運動調節能力の評価では、立ち幅跳びと垂直跳びを使用し、最大努力での跳躍に対して主観的に半分の努力だと思ふ跳躍を各3回実施させた。各跳躍について、最大跳躍に対する相対値（%）から50%を減じた誤差を絶対値化し、3回の平均誤差（%）を評価指標とした。分析は、経験年数により2年未満（短期経験群 n=21）と2年以上（長期経験群 n=43）に群分けし、各項目の群間比較には共分散分析(共変量:性別・年齢)を実施した。【結果】YBTの全評価項目および閉眼片脚立ちテストには有意な群間差を認めなかった。運動調節能力では、立ち幅跳びにおいて短期経験群（平均誤差：24.4±9.5%）と長期経験群（平均誤差：17.8±8.8%）に有意な群間差が認められた。垂直跳びにおいても、短期経験群（平均誤差：19.6±10.3%）と長期経験群（平均誤差：13.4±7.1%）に有意な群間差が認められた。【まとめ】長期の習慣的なトランポリン運動経験が子どもの運動調節能力向上に寄与することが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-07] 新体力テストからみた中学生の誕生月別体力推移の分析**

相対年齢効果に着目して

*木戸 大貴¹、吉川 鷹吏¹、佐藤 智樹¹、大島 秀武² (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

本研究は、中学生における体力の発達と誕生月の関係、特に「早生まれ（1～3月生まれ）」の生徒に焦点を当て、体力テストの結果に相対年齢効果（RAE: Relative Age Effect）が見られるかを検討したものである。学年制を採用する日本の教育制度では、同学年内で最大11か月の発育差があり、誕生月によって身体能力に差が生じることが知られている。これまで、小学生の段階からすでに誕生月による体力差が確認されており、特に早生まれの児童は握力や50m走などで遅生まれに比べて不利な傾向があることが報告されている。このような差は中学・高校と進学する中で競技成績や選抜に影響を与え、結果として、全国大会出場選手の多くが相対的に年齢の高い、いわゆる遅生まれの選手で占められていることも明らかになっているが、一般中学生の縦断的な体力の変化とRAEの関係を検討した研究は少ない。

本研究では、中学校に在籍する男女の生徒を対象に、毎年行われている新体力テストの8項目（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、持久走、50m走、ハンドボール投げ、立ち幅跳び）の3年間のデータを分析し、誕生月と体力の関係を明らかにした。誕生月は4つのグループに分け、特に早生まれの生徒の体力傾向に着目した。

結果として、中学1年生の段階で、女子には有意な相対年齢効果は見られなかったものの、男子では長座体前屈と反復横跳びを除く6項目で相対年齢効果が確認された。中でも握力・50m走・立ち幅跳びの3項目は3年間を通して継続して差が存在し、早生まれの男子生徒が一貫して低い成績を示した。一方で、その他の項目では学年が進むにつれてその差は縮小傾向にあった。これらの結果は、体格差や筋力差によって早生まれの生徒が運動能力で劣って評価される可能性を示しており、運動への苦手意識や体育嫌いにつながるおそれがあることが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-08] 中学生における運動嗜好と体力レベルの関係**

学年別傾向の検討

*佐藤 智樹¹、木戸 大貴¹、吉川 鷹吏¹、大島 秀武² (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

近年、子どもの体力低下が社会的な課題として注目されており、とりわけ運動を好まない、いわゆる「運動嫌い」の子どもたちの増加が指摘されている。小学生を対象とした先行研究において、体力レベルが低いグループでは運動有能感、すなわち「自分は運動が得意だ」と感じる感覚が低い傾向が示されている。また、運動有能感が低いことは、運動に対する苦手意識や消極的態度を生む要因ともなり、結果的に体力の低下につながるという悪循環が報告されている。そのため、心理的側面と体力との関係性をより長期的な視点から明らかにすることが求められている。そこで本研究では、中学1年生から3年生までの生徒を対象として、運動嫌いと体力レベルとの関係性を明らかにすることを目的とした。対象は、中学1年生133名、2年生127名、3年生120名とし、新体力テスト（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、20mシャトルラン、50m走、立ち幅跳び、ハンドボール投げ）実施するとともに、運動に対する好意度を質問紙によって調査した。その結果、運動やスポーツをすることが「嫌い」または「やや嫌い」と回答した生徒の割合は、男子で16%、女子で30%であったことから、特に女子生徒に着目して分析を行った。運動やスポーツをすることが「好き」または「やや好き」と回答した生徒を高嗜好群、「嫌い」または「やや嫌い」と回答した生徒を低嗜好群として分類した結果、1年生では、上体起こし、20mシャトルラン、50m走、ハンドボール投げの4項目において両群間に有意な差が認められた。2年生では、反復横跳び、立ち幅跳びを加えた6項目において、3年生では、全8項目において有意な差が認められた。以上の結果より、運動に対する好き嫌いが学年の進行とともに体力レベルに顕著に表れることが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-09] 幼児の簡便な運動能力評価ツールSMC-Kidsの結果票作成システムの開発**

*香村 恵介¹、出村 友寛²、高橋 功祐³、小椋 優作⁴、松浦 稜⁵、喜屋武 享^{5,6}、縄田 亮太⁷ (1. 名城大学、2. 仁愛大学、3. 石巻専修大学、4. 中部学院大学短期大学部、5. 琉球大学、6. 京都大学、7. 愛知教育大学)

幼児期の運動能力は、健康のみならず、認知機能や学習の基盤にも影響を与える重要な指標である。しかし、保育現場における運動能力測定の実施率は依然として低い。そこで我々は、特別な用具や広いスペースを必要とせず、短時間で実施可能な簡便な測定法「Simple Motor Competence-check for Kids (SMC-Kids)」を開発した。SMC-Kidsは、10m折り返し走と紙ボール投げの2項目から構成されており、3～6歳の幼児1650名（7県32園）のデータを基に、年齢別・性別のパーセンタイル基準値が作成されている。本研究では、SMC-Kidsを保育現場で効果的に活用するため、測定データの管理・評価・共有を支援するExcelマクロによる結果票作成ツールを開発した。仕様の検討には、測定経験のある幼稚園教諭2名および子どもの身体活動・運動に関する研究者7名との意見交換を踏まえた。ツールは、個人・クラス・学年・園全体の各単位で結果票を自動生成できる。個人結果票では、複数時点の測定結果から運動発達の推移を視覚化できるとともに、結果票を見て保護者の関心が高まった際に、すぐに実践できる親子遊びを結果票の下部に併記した。保護者への更なる情報提供に使用するQRコードや結果票の見方を記載するスペースも設け、このスペースは使用者の実情に応じて差し替えることもできる柔軟な運用を可能とした。クラス・学年別結果票では、運動発達が緩やかな子（スコア1・2）を一覧で表示し、担任が支援対象を把握しやすい構成とした。園全体の結果票では、学年別平均スコアに加え、スコア1・2の割合の経年変化も提示することで、平均の変化に加え、発達の底上げ状況も可視化した。本ツールは、保育現場や家庭、地域において、幼児の運動発達を手軽に「見える化」する支援ツールとしての活用が期待される。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-10] 発育発達を考慮した体格指標の検討**

*石原 勇次郎¹、宇野 直士²、新美 尚行³、松田 晃二郎⁴ (1. 岡山理科大学、2. 山陽小野田市立山口東京理科大学、3. 九州国際大学、4. 城西大学)

本研究は、発育発達研究（石原・村木、2022）で提案された身体組成カテゴリーモデル（以下、カテゴリーモデル）と体力・運動能力に関する調査を行った。カテゴリーモデルは、身体組成指数である除脂肪量指数（FFMI）と脂肪量指数（FMI）の組み合わせに基づき、体格を6つのカテゴリーに分類したものである。各カテゴリーは次のように定義されている：カテゴリー1（低FFMI・低FMI）、カテゴリー2（低FFMI・普通FMI）、カテゴリー3（高FFMI・低FMI）、カテゴリー4（高FFMI・普通FMI）、カテゴリー5（高FFMI・高FMI）、カテゴリー6（高FFMI・超高FMI）。これらのカテゴリーにおいて、FMIとFFMIの組み合わせは異なる。カテゴリーモデルと体力・運動能力との関連性については、新体力テスト8項目の合計点（以下、総合点）および体力要素との関連が確認されている（石原・村木、2022）。しかし、本モデルの作成および体力との関連は、大規模（全校生徒約1,500名）の1つの高校のみで検討されている。そこで本研究では、特性の異なる対象を基に、カテゴリーモデルの外的妥当性を検討することを目的とした。対象は、福岡県、島根県、岡山県内の男子高校生とした。測定項目は、形態（身長、体重）および身体組成、体力・運動能力とした。体力・運動能力の評価には文部科学省の新体力テストを用い、得られた総合点をカテゴリー1から6まで並べると、カテゴリー3と4が高い値を示し、逆U字のような放物線を描いた。この結果は、モデルを作成した高校および異なる高校の両方で同様に得られた。これらのことから、カテゴリーモデルと体力・運動能力との関係は強固であると考えられる。今後は、カテゴリーモデルの普遍性を検証し、体力・運動能力評価方法の改善点を洗い出し、より実用的な評価基準を確立することが必要である。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-11] 高這い姿勢の幼児が手で体を支える運動指導方法の開発**

*佐近 慎平¹、中曽根 裕²、中井 聖³、金子 勝司⁴ (1. 新潟医療福祉大学、2. 仙台青葉学院短期大学、3. 大阪電気通信大学、4. 大阪体育大学)

幼児の顔面外傷の原因は、転倒が1位、ぶつかった相手は、床・地面（40%）が最も多い。我々はその原因の一つとして「手で体を支える動き」を挙げている。移動手段の発達と共に、手の自由を担保するために、手で体を支える動きの減少の影響も考えられる。乳幼児は、寝返り、ずり這う、四つ這い、つかまり立ち、つたい歩き、そして、二足歩行へと移動手段が進む。歩行を開始するまでの移動手段として、ずり這いと四つ這いと比べ、高這いはあまり出現しない。そのため、高這いは、保育者や指導者などによる介入が必要である。これまで我々は、幼児の高這い走の動作をスロー映像で分析して、高這い走の動作を分類してきた。高這い走の速い幼児の四肢動作は、四肢で接地離地の内、1点支持の出現が多くみられた。さらに、1点支持は、同側での2点支持が前動作として見られる傾向にあった。そのため、高這い姿勢での運動環境、床でのボルダリング提案してきた。その運動環境を楽しく、幼児が継続するための補助教材としてドレミマーカーを開発した。ドレミマーカー・ボルダリングは、体支持持続時間の時間が短い幼児年長において改善が見られた。しかし、ドレミマーカーを使用した運動環境は、幼児の主体性を担保しているが保育者による指導方法が明らかになっていなかった。そのため、本研究では、同側での2点支持、手で体を支える運動の指導方法を開発した。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-12] 大学生の主観的健康感と体力レベルおよび生活習慣との関係***吉川 鷹吏¹、木戸 大貴¹、佐藤 智樹¹、大島 秀武² (1. 京都教育大学大学院、2. 京都教育大学)

主観的健康感とは、高い人ほど疾患の有無に関わらず生存率が高いことや、平均寿命に影響を与えるとされており、死亡リスクの予測妥当性の高い指標として用いられている。WHOによると、健康とは、「単に病気がないだけでなく、肉体的、精神的、社会的な全てにおいて良好な状態であること」として定義づけられている。その一方で、「健康日本21」によると青年期での健康観は、病気の有無ではなくむしろ美容やファッションという視点で健康を捉えているとされている。大学生は、一人暮らしや長時間の通学、部活動、サークル活動、アルバイト、ボランティア活動など、社会環境の変化によって生活習慣にも変化が起こり、運動習慣の不足や睡眠不足、ストレスなどの様々な要因が主観的健康に影響していると考えられる。そこで本研究では、生活習慣や体力レベルが大学生の主観的健康度とどのように関連しているのかを明らかにすることを目的とした。

対象は大学1回生の男性97名、女性170名とし、主観的健康感、運動習慣、朝食摂取の有無、睡眠満足度を質問紙により調査した。体力レベルについては新体力テスト（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、20mシャトルラン、50m走、立ち幅跳び、ハンドボール投げ）を実施し、その合計得点を算出した。主観的健康感の結果から、健康群（非常に健康である）、やや健康群（まあ健康である）、非健康群（あまり健康でない・健康でない）の3群に分けて比較検討を行った。

結果として、体力レベルについては、男女共に3群で有意な差が認められ、健康感が高い群ほど体力レベルも高値を示した。生活習慣については、男性は睡眠満足度のみ差が認められた。女性では、運動習慣、睡眠満足度に差が認められた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-13] トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査 (1)**

単純集計による実態把握

*篠原 俊明¹、長野 康平²、堀内 亮輔³、中村 和彦⁴ (1. 共栄大学、2. 比治山大学短期大学部、3. 東京女子体育短期大学、4. 山梨大学)

【背景】遊び・運動・スポーツ経験は、子どもの発育発達に加え競技力向上においても重要である。アスリートの過去の運動経験に言及した研究は少なく、言及した研究をみると大学生や特定の競技のトップアスリートを対象としたものとなっている。他方、我が国にはボール競技毎に最も競技レベルの高いトップリーグが存在している。各ボール競技のトップリーグで活躍するトップアスリートを対象とした大規模調査を実施することで、より詳細にアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験の実態を把握することが可能となり、健全な発育発達や競技力向上において重要な知見が得られる。【目的】各ボール競技のトップリーグで活躍するトップアスリートを対象に、過去の遊び・運動・スポーツ経験の実態を大規模調査から把握することを目的とした。【方法】一般社団法人日本トップリーグ連携機構に加盟する9競技、12リーグに在籍する・在籍していた選手1184名に回答を依頼し、同意が得られた日本国籍の1156名を解析対象とした。質問項目は、性・年齢・専門競技・代表歴等の基本属性、トップアスリートを目指すための運動経験に関する考え、専門競技の成績、幼少年期（3歳から10歳）の専門競技の取組状況および外遊び状況とした。トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験の概況を捉えるために単純集計を行った。【結果】トップアスリートを目指す場合いつ専門競技のみに絞って取り組むことが良のかという質問について、小学校1年生、中学校1年、高校1年生という進学タイミングで割合が高くなり、中学1年生が25.8%で最も高かった。幼少年期において、平日に専門競技に取り組んでいなかったとの回答は、幼児期で84.3%、低学年で62.5%、中学年で39.0%となった。外遊びを平日5日間していた割合は、幼児期、低学年、中学年はいずれも50.0%前後であった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-14] トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査 (3)**

性差による検討

*長野 康平¹、篠原 俊明²、堀内 亮輔³、中村 和彦⁴ (1. 比治山大学短期大学部、2. 共栄大学、3. 東京女子体育短期大学、4. 山梨大学)

【目的】 トップアスリートにおける過去の遊び・運動・スポーツ経験、トップアスリートを目指すための運動経験に関する考えに、性差があるか検討すること。【方法】 一般社団法人日本トップリーグ連携機構に加盟する9競技、12リーグに在籍する・在籍していた選手で同意の得られた1177名のうち、性別の回答がなかった6名、および国籍が日本以外であった21名を除いた1150名（男性：601名、女性：549名）を解析対象とした。過去の専門競技／専門競技以外の取組状況、トップアスリートを目指すための運動経験に関する考え等の性差の検討には、カイ二乗検定を行い、有意差が認められた場合は残差分析を行った。【結果】 専門競技の開始時期は、男性が幼児・高校生・大学入学以降が有意に高い割合を示し、小学校低学年・小学校中学年では女性が有意に高い割合を示した。過去の最高競技成績では、一貫して女性が高い競技成績をおさめていた割合が高く、日本代表経験も、女性が有意に高い割合を示した。幼少児期の競技経験についても性差が認められ、男性は3種目以上経験している割合が有意に高かった。トップアスリートを目指すための運動経験に関する考えは、ひとつの競技に専門的に取り組むことの至適学年は、女性が小学校中学年・高学年の割合が高く、男性は高校生・大学入学以降の割合が有意に高かった。トップアスリートを目指す際に、各世代で、ひとつの競技だけに取り組むべきか、複数の競技に取り組むべきかについては、一貫して複数の競技に取り組むの回答は男性が有意に高い割合を示した。【結論】 トップアスリートにおける過去の遊び・運動・スポーツに経験、トップアスリートを目指すための運動経験に関する考えには、性差が認められ、女性はより早期から専門競技を実施する傾向があり、トップアスリートを目指すことを考えた場合、男性よりも早期に単一種目を志向する傾向がみられた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-15] 幼児期における国際交流経験は記憶を通じたSES向上につながるか
南アフリカとの身体活動・体験活動を通して***山崎 幸歩¹、村山 敏夫¹、樺澤 茉宝¹、亀岡 雅紀² (1. 新潟大学、2. 新潟医療福祉大学)**【背景・目的】**

少子高齢化やグローバル化が進行する現代社会において、幼児期からの異文化理解や国際的視野の育成が注目されている。質の高い幼児教育は、言語使用や早期の識字・計算、社会情緒的スキル（SES）など多様な発達と、就学後の学習にも有益とされる。中でも身体活動を含む体験的な国際交流は、幼児の発育や社会性・情動面の育成に資する可能性があるが、その中長期的影響を検討した研究は少ない。本研究では、南アフリカの子どもたちとの交流による身体活動や栽植体験などが、幼児にどのような影響を与えたかを、交流から半年後のインタビューで明らかにすることを目的とした。

【方法】

N市内の4保育園の年長児を対象に、2024年5月～12月にかけて、各園で2回（各回最長60分）の国際交流活動を実施。活動には、野菜の栽植、遊び、絵本の読み聞かせや体操などを含めた。半年後、参加児へインタビューを行い、記憶、印象、異文化理解について分析した。

【結果】

- ①多くの幼児が「ジェスチャーゲームをした」「野菜を植えた」など、身体を使った体験を具体的に話していた。
- ②ある園では「教室に地図があったから南アフリカを知っていた」との回答が多く、事前の環境設定の効果が示唆された。
- ③「楽しかった」と答えた幼児ほど、交流内容を具体的に説明できた。

【考察・結論】

身体活動や体験を伴う国際交流は、半年後も幼児の記憶に残りやすいことが示唆された。また、事前・事後の情報提供や環境設定が体験の理解を深める可能性がある。今後は、発達段階に応じた国際交流プログラムの設計と評価を通じて、SESを含む実践的教育手法の構築が求められる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-16] トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験に関する大規模調査 (2)**

マルチスポーツ経験による検討

*堀内 亮輔¹、篠原 俊明²、長野 康平³、中村 和彦⁴ (1. 東京女子体育短期大学、2. 共栄大学、3. 比治山大学短期大学部、4. 山梨大学)

【目的】 トップアスリートの過去の遊び・運動・スポーツ経験とマルチスポーツ経験との関連について明らかにすること。【方法】 一般社団法人日本トップリーグ連携機構に加盟する9競技、12リーグに在籍する・在籍していた選手で同意の得られた1177名のうち、有効な回答が得られた1156名を解析対象とした。専門競技を始めた学年、専門競技を中心的に取り組み始めた学年等とマルチスポーツ経験との関連には、カイ二乗検定を行い、有意差が認められた場合は残差分析を行った。なお、マルチスポーツ経験については、幼少年期に取り組んでいた運動・スポーツの種目数のうち、3種目以上が37.1%、2種目が32.1%、1種目が30.6%であったことから、単一群、2種目群、3種目以上群の3群に分類した。【結果】 トップアスリートが幼少年期に取り組んでいた運動・スポーツの種目数は2種目群、3種目群のマルチスポーツを経験していた割合が69.4%を占め、単一群よりも多かった。専門競技を始めた学年では、単一群は小学校低学年の割合が有意に高く、幼児期の割合が有意に低かった。一方、3種目以上群は中学生の割合が有意に高く、小学校低学年の割合が有意に低かった。専門競技を中心的に取り組み始めた学年では、単一群は小学校低学年、小学校中学年の割合が有意に高く、中学生の割合が有意に低かった。一方、3種目以上群は中学生の割合が有意に高く、小学校低学年、小学校中学年の割合が有意に低かった。【結論】 トップアスリートにおける過去の遊び・運動・スポーツ経験には、マルチスポーツ経験による関連が認められ、単一群では、専門競技のスポーツ開始時期や中心的に取り組み始めた時期は小学校低学年が多く、3種目以上群では中学生が多かった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-17] 幼児の日常活動における運動遊びと身体活動動作**

保育者調査から

*佐々木 玲子¹、石沢 順子² (1. 慶應義塾大学、2. 白百合女子大学)

幼少期は、神経系の発達が著しい時であり、体を動かすことにより様々な運動刺激を継続的に受けて動きを獲得していき、さらに上達していく時期である。幼児にとって、幼稚園、保育所などの保育施設は、身体活動の量、質ともに確保される大切な場となっている。特に保育活動中の運動遊びの中には、走る、跳ぶ、投げるなどを始めとして多くの動作が含まれており、それらを通じた活動は、子どもたちにとって多様な動き、運動パターンを経験し身につける重要な機会となっている。本研究では、実際の保育現場において、子どもたちが日常どのような活動（運動遊び）を行い、それらを通じてどのような動きを経験しているのかについて、保育士へのアンケートを用いてその現状を調査した。

東京都内の幼稚園14園の、保育現場で直接子どもたちとかわりを持つ保育者（クラス担任など）を対象として、アンケート調査を実施した。各園の日常の園活動において、幼児が実際に行っている頻度の高い運動遊びおよびその遊びに含まれる基本的動作について、アンケート用紙を作成し、回答を得た。併せて、園の広さ、所有する設備、遊具、等の環境要素についても尋ねた。これらの回答から、運動遊びの実施状況、実施している遊びの数や種類、および含まれる動作の種類について明らかにすることを試みた。

調査の結果から、鬼ごっこ系の遊びは、すべての幼稚園で、どの学年においても頻度高く実施されていた。しかし、動作に着目すると、そこに含まれる動作は、年少児は「歩く」「走る」が主体であったのに対し、年長児では「かわす」「つかまえる」動きが増えるなど、動作の種類が多様になる傾向がみられた。また、遊具を使った遊びは、どの学年も同程度に実施され、またそれに伴って同様に一定の動作が引き出されることが推測された。全般的に、年齢に伴って、遊びの種類および動きの質が異なり変容していくことが推察された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表

[07発-ポ-18] 大学1年生アスリートのキャリア観とキャリア支援の実態 一対1対話の有用性に着目してー

1対1の対話によるキャリア形成支援の可能性を探るー競技生活からワークキャリア・ライフキャリアへの拡張ー

*堅石 亜也子²、小泉 朝香³、山口 香¹ (1. 筑波大学、2. アデコ株式会社、3. 株式会社トリデンテ)

本研究は、筑波大学体育専門学群に推薦入試で入学した大学1年生アスリートを対象に、キャリア観およびキャリア形成支援の現状を明らかにすることを目的とした。

対象者は、水泳・柔道・陸上・体操・バドミントンの個人競技に取り組む10名であり、半構造化インタビューを通じてキャリア観および支援の実態を探った。分析にはKJ法を用いたインタビューの逐語録をもとに、時系列に沿ったキャリア観の変化を図解化および叙述化した。

インタビュー結果からは、大学進学動機として「競技力の向上」や「実業団への通過点」といった競技キャリアへの意識が強調される一方、「教職課程の取得」「指導者としての道を模索したい」といったワークキャリアへの興味も確認された。また、「興味のある分野を見つけたい」「引退後のキャリアに不安がある」といったライフキャリアへの関心も見られた。筑波大学体育専門学群において必修科目として設置されている《スポーツキャリア形成》は、学生がキャリアについて考える契機として機能しているが、さらに今回の1対1の対話時間を通じて「普段話せないことまで話せた」「自分のキャリアについて振り返る機会になった」という声が多く寄せられた。これにより、必修科目の学びを補填する場としての1対1対話の有用性が確認された。特に、キャリアコンサルティングのような場が設けられることで、学生は自身の経験や価値観を言語化し、「次のステップが見えた」「漠然と考えていた進路が少し具体化した」といった前向きな効果が得られていた。

今後は、体育専門学群の《文武不岐》の理念を軸に、必修科目の学びを深化させる1対1対話の体系化およびその効果の検証が求められる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-19] 小学校教諭養成課程のシラバスから見た運動遊びの位置づけと幼児期との接続に関する教授内容***吉田 伊津美¹ (1. 東京学芸大学)

【目的】保育現場の運動指導は活動中心に偏っている傾向がある。「運動遊び」や「動き」に関し平成29年告示の要領等では乳児期から幼児期、さらには児童期(小学校)まで連続したつながりが示されたといえる。幼稚園教諭養成校のシラバスでは領域健康の指導法及び専門的事項において「運動」がもっとも多く記載されていた一方で、「多様な動き」「小学校」とのつながりについては必ずしも扱われていなかった(吉田,2025)。そこで本研究では、小学校教諭養成課程の初等体育科関連科目に着目し、幼児期との接続に関する内容の位置づけと教授内容をシラバスから明らかにすることを目的とした。

【方法】令和5年4月現在、小学校教諭一種免許が取得可能な通学制262大学の内(文部科学省,2023)、Webより入手可能な「教科及び教科の指導法に関する科目」を中心とする初等体育科に関する641科目(250大学)を収集した。各シラバスの項目の内、内容および授業計画に記載の事項に対しKHcoder3(樋口,2004)により共起ネットワーク分析を行った。

【結果と考察】全体的には教職課程コアカリキュラム(教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会,2017)や教科教育モデルコアカリキュラム(広島大学大学院教育学研究科,2018)で示されている事項等が網羅されていた。「運動遊び」は低学年に関する内容がほとんどであったが、一部幼児や保育・幼稚園等における「運動遊び」の記述もあり、幼児期から体育への移行や接続を扱っている科目もごく少数みられた。関連語検索により「幼児期」「運動遊び」と共起する語では、「幼児期」は「運動」「運動遊び」「発達」「児童」などと、「運動遊び」は中学年、高学年の領域名との結びつきが強かった。「運動遊び」は中学年以降の各領域との関連が主で、幼児期からの接続や基本的な動きとの関連はシラバス上ではほとんど見られなかった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-20] セーリング競技における帆走に関する宣言的知識の艇種による違いについて***坂口 英章¹、青柳 領 (1. 日本経済大学)

【緒言】セーリング競技においても状況判断能力の基礎として宣言的な知識の有無が重要である。特に、二人で共同して操船する場合と一人で操船する場合では必要とされる知識には違いがあることが考えられる。そこで、本研究ではセーリング競技において中心的知識となる帆走について問う知識の艇種による違いについて検討する。【方法】2019年F県大会と茨城夢国体セーリング競技そして、2019年全国高校総体ヨット競技に参加し、本研究の趣旨に賛同した174名を対象に40項目からなる艤装に関するテストを行った。互いの知識間の影響を一定にして関連を検討するために、正答は1、誤答は0と変換したデータに数量化理論Ⅱ類を適用し、重相関比、偏相関係数、カテゴリーウエイトのレンジを求め、両者の違いを検討した。【結果】求められた重相関比 η は0.499と高い関連を示し、正判別率は70.59%と高く、帆走に関する宣言的知識の艇種による違いがみられた。偏相関係数(PC)およびカテゴリーウエイトのレンジ(RG)が大となったテスト項目は、「サイドジャイブ手順(RG=0.9403、PC=0.2249)」など8項目であった。その中では、求められた判別得点の平均値が「一人乗り」が負で、「二人乗り」が正であったことから、「アビーム角度」「セールシェイプリンクル」では「一人乗り」の方が優れ、それ以外の「サイドジャイブ手順」「マストベンドリンクル」「風上側のテルテールの反応」「風下側のテルテールの反応」「ジャイビング」「上マーク回航トリム」では「二人乗り」の方が優れていた。この点については、①対象者の競技レベル、②「二人乗り」の場合、役割が分かれているのでそれに該当しない者の知識がないこと、③艇の構造の違いによりそのような点を特に考慮する必要がないことなどが知識の差の原因と考えられた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-21] 妙高市産学官連携による幼児の数学的な能力に着目した自然体験型運動あそびプログラムの開発と実践***樺澤 茉宝¹、木下 昭二²、村山 敏夫³ (1. 新潟大学大学院、2. ミズノ株式会社、3. 新潟大学)

近年、幼児期の運動あそびを通じた数的思考や認知能力の発達が教育において重要な位置づけとなっている。特に、体力・運動能力と数学的な能力との関連を明らかにする研究が進んでおり、抽象的な概念を実体験に基づいて理解する体験的な学びの場の重要性が指摘されている。一方で、従来の幼児教育では、それぞれの学びが分離して扱われることが多く、五感や身体を使った体験を通じて数学的な能力を育む実践は限定的である。そこで本研究では、新潟県妙高市をフィールドに、産学官連携による自然体験型運動あそびプログラムの実践について報告する。本プログラムは、自然環境との関わりを重視し、屋外での身体活動を通じて体力・運動能力を育みながら、創造力・探究心・数的思考への導入を目的としている。開発に際しては、新潟大学、妙高市、ミズノ株式会社の連携体制をとり、学術的視点と教育現場の実践を融合させて体験内容を構想した。また、本プログラムを妙高市内の園で実施し、子どもたちの活動中の継続的な観察記録をもとに、プログラム内容の検証と改善を行った。本研究では、実践を通じて得られた成果として、遊びながら学ぶ楽しさの実感、自然環境を活かした運動と学びの統合、子どもの創造性・探究心の発現、数的・科学的思考の萌芽について具体的なエピソード事例を交えて報告する。また、現場の保育者から得られたフィードバックに基づく今後の改善点や、継続可能な運営体制についても考察する。本研究は、地域資源を活かした新たなSTEAM教育モデルとして、今後の地域教育の質向上と子どもの学びの多様性を促進する一助となることが期待される。さらに本研究を発展させていくことで、妙高市の豊かな自然資源を活用した幼児期の教育プログラムを構築していく。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:20 ■ メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階) / 発育発達

[3b180-101] 発育発達／ポスター発表**[07発-ポ-22] 5歳児の足圧中心動揺における試行間信頼性**

*溝畑 潤¹、青木 敦英²、秋武 寛³、三木 伸吾⁴、田路 秀樹² (1. 関西学院大学、2. 芦屋大学、3. 西南学院大学、4. 島根大学)

【目的】本研究は5歳児の足圧中心動揺の試行間信頼性について明らかにすることを目的とした。【方法】被験者は大阪府下のA幼稚園に在籍する5歳児男女14名（男児6名、女児8名）であった。足圧中心動揺の測定にはアニマ社製グラビコーダーGS-7を使用し、開閉眼における変数それぞれ6項目（外周面積、単位軌跡長、単位面積軌跡長、総軌跡長、矩形面積、実効値面積）を分析した。測定は日本平衡神経科学会、平衡機能検査基準化委員会（日本平衡神経科学会、2006）が定めた環境を設定して、午前中に実施した。測定に際して、被験者には最初に検査台後方の椅子に着席させ、リラックスした状態であることを確認した後、検査台上に閉足の直立姿勢をとらせた。被験者の手の位置（両腕が体側に接している）、視線の位置（2m前方の目の高さに固定した視点を注視している）、直立姿勢の安定を確認した後、開閉眼条件でそれぞれ30秒間測定した。測定は1分間の休息を挟み3回連続して実施した。なお、休息時は検査台上の足の位置が変わらないように椅子に座らせた。【結果および考察】開眼の級内相関係数（ICC）はいずれの変数も0.75以下であり、総軌跡長の0.72が最も高かった。一方、閉眼のICCは単位軌跡長（0.75）、単位面積軌跡長（0.89）および総軌跡長（0.75）が0.75以上であった。筆者らの小学4年生を対象にした足圧中心動揺の試行間信頼性の報告と同様に、開眼よりも閉眼の方が優れていた。【結論】本研究の結果から、幼児期から閉眼の足圧中心動揺の試行間信頼性が高いことが示唆された。